



子どもたちとワークショップを
する中で感じたことから、探究
的な場づくりのコツやファシリ
テーションのヒントを探ります。



きえるって
もしもいろいろかも!?

第42回

脳科学を活かしてかかわってみる

どんな方法で
学んでいる?

子どもたちの学び方は十人十色。

とはいえ、そんな多様な学び方に寄り添おうとするとき、何を軸にかかわり方を選ぶとよいか迷うことはありませんか?

以前、幼児さんたちとボタンを分類するアクティビティをしていた時のこと。普段は見えないような多種多様なボタンに子どもたちはもう夢中。色や形、穴の数などの特徴ごとにボタンを分けてみようというスタッフが促すのですが、分けたそばから自分のお気に入りのボタンを手元にかき集めて分類を崩してしまします。

そんな中、一人の女の子がプラカップの中にボタンをいくつか入れてジャカジャカ振り始めました。どうやら音を楽しんでいるようです。そこで、「ボタンの数を増やしたら音は変わるかな?」と聞いてみました。彼女は「握りのボタンを追加して振り、また違うボタンを入れて振りと、遊び始めました。やはり音が楽しいようです。」

使っている知能に
合わせる

それなら音で分類できるようにしてみようと、僕はプラカップを3つ並べ、「キラキラ(金属)のボタンをここに投げ入れてごらん」と促してみました。ボタンがカップの底に当たるとコンツと音がします。そこにボタンが溜まってくると、カシャツと音が変わります。女の子は目をキラキラさせてボタンを投げ入れていきます。「次のカップにはどのボタンを入れる?音が違うかもよ?」と聞



くと、「とうめいなボタンにする!」とアクリル製のボタンを投げ入れます。ほかの子たちも参加して、カップを使ってボタンの分類ができました。

これは、ELMSで大切にしているMI理論(※)に基づいたかかわり方です。MI理論では、人間の知能を言語、論理、身体、音楽など細分化して捉えます。そして、その子の得意な知能を活かしてかかわること子どもたちが活動に乗りやすくなります。今回は、女の子が好んでいた「音(音楽的知能)」を入口にすることで分類に取り組みやすくなりました。

何を軸にかかわり方を選ぶか迷ったとき、子どもたちの「脳」を見てみると、探究のストーリーがつながりやすくなるのでおすすめです!

※ハーバード大学の心理学者ハワード・ガードナーが提唱した理論で、「人間の知能は単一ではなく、言語・論理・音楽・身体など8種類の知能がある」とする考え方。

鴨川 光

(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。
ELMSセンター主席研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

